

3 高岡長崎家の『家方抄』について

— 宝永期からの蘭方外科医の繁用薬方集 —

正 橋 剛 二

富山市(医) 白雲会

高岡町の蘭方外科医長崎家の初代は長崎で修業し、元禄・宝永(一六八八〜一七一〇)頃高岡に移住した。以後代々外科医として繁昌し、同家の蔵書もある時期には八千冊にのぼったとされるが、度重なる大火(少くとも三回以上)のため、現存するものはおよそ五百冊、しかも、その多くは第五代浩斎(一七九九〜一八六四)以後の収集で四代以前のものには甚だ少ない。

ここに報告する『家方抄』(一四×一七、三三丁)は、これら数少ないものの内の一冊で、第四代玄庭(蓬洲、一七六五〜一八二九)が、それまで同家に伝えられた『家伝膏葉能書』を中心に、加除再編したものと見られ、同家の日常的診療の内容を知る上に甚だ有力な手がかりを与えるものであろう。その序文には、

「此一冊ノ中ニノスル薬方、先ツ朝夕入用ノ薬方バカリ記ス、外ニ又附薬類、膏葉、服薬方、外科一卷ノ秘事ハ別記アリ、葉製法疎略ニシテ、伝法ヲ用イズ、其ノママニ使フ時ハサラニ功ウスシ、ヨクく心得ベシ」と見える。以下の本文に示される薬方四一種(便宜上整理番号を付す)を列記する。

- ①△極良膏 ②△金精膏 ③△膿気膏 ④△当帰膏
 ⑤△白明膏 ⑥△呂洞膏 ⑦△痛止膏 ⑧○白散 ⑨○楊散 ⑩○蛻散 ⑪○黄散 ⑫○奇良散 ⑬○麒麟血末 ⑭○鉄生散 ⑮○乳首切レタル薬 ⑯○痔薬 ⑰○煉薬 ⑱○朱砂安神丸 ⑲(附) 家方加減安神丸 ⑳○木香丸 ㉑○屠蘊 ㉒○大補龍珠丹 ㉓○疳毒涎薬 ㉔○疳毒下シ薬(梅肉丸) ㉕○家秘五宝丹 ㉖○氷砌散 ㉗○松脂(チャン)製法 ㉘○咽ニ物タチタルノ咒 ㉙○錢ノ吞ミタル ㉚○走馬疳ノ方 ㉛○肉流ノ方 ㉜○瘤ヌキ薬 ㉝○洗薬 ㉞○癩疽蛇頭瘡洗薬 ㉟(附) 金瘡ノ血止 ㊱(附) 諸血症 ㊲(附) 坐薬 ㊳△辰砂丸 ㊴(附) 疣ノ薬 ㊵(附) 薄荷煎 ㊶(追) ルウダ膏

右の各々について、効能・効果、成分・組成、調

剂・調製法、投与法および各留意点等を甚だ具体的に記述している。これらの薬方は序文の記述の通り、長崎家の診療とは緊密な関係にあり、いわば繁用薬方集であるが、使用法から区分すると、外用薬（膏薬、塗り薬、吹付薬、燻蒸薬、洗薬、軟膏基剤）が最も多く二六種、これ以外は一五種で、この中には軽粉（塩化水銀）を含む薬方四種（⑬⑭⑮⑯）辰砂（硫化水銀）を含むもの二種（⑳㉑）が目立っている。いずれも楊梅瘡（梅毒）疳毒（下疳）等、当時猖獗を極めた性病の治療薬である。とは言え、一七七五年に来日したツウンペリーによってわが国に伝えられたスウィーテン水に関する記述は見られない。また蘭方医学とは無関係な呪と見られるもの（㉒）あるいはこれに近いもの（㉓）があり、さらに患者への挨拶用の㉔（歳暮用）および㉕（新年用）もある。

これらの薬方は、少くとも四代玄庭の書き残した『折肱録』（難治二七例の記録）の記述とよく合致するようで、同家の蘭方外科の看板のもとには、少くとも第四代までは、各種外傷（切創、打撲症）膿瘍、火傷、

熱傷、皮膚病、性病（淋病、下疳、梅毒）等の患者が集まったと推定される。一方、杉田玄白が『蘭学事始』の冒頭で述べた当初の蘭方は外科中心であった事情、また後年宇田川榕庵が『遠西医方名物考』の序文で書いたように、当初の日本人医師には「和蘭には外科があるだけで内科はないのか」という疑問があったとする事情、これらの事情を裏付ける資料でもありと思われる。なお、口演に当っては、もし可能なら、全収蔵書の時系列的収集状況についてもふれたいと思つてゐる。